
ほおずき、ぱん

真澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほあずき、ぱん

【Zコード】

Z6083T

【作者名】

真澄

【あらすじ】

15歳の「みつ」には最近気になる相手ができた。父親の古い知り合いだという居候。憎まれ口ばかり叩いてしまうけれど、頬が赤くなるのは止められない。

けれどみつは知らなかつた。その人の裏の稼業を。その人が守つてきた秘密を。

江戸を舞台にした物語です。時代考証が完全ではないのはご容赦を。

完結済の「サムライ・ラヴァー」という作品と同じ世界の話です。独立した作品にしたつもりですが、書いた順番と同じく「サムライ」を先にお読みいただいたほうが、もしかしたら読みやすいかもしません。

だって初めての気持ちだから

「おまかじおれまー」

「おー、おみつちゃん熱い汁物も運べるようになったのか

昼餉の客で賑わう食事処「たけや」。常連客の軽口で、看板娘の「みつ」は口を尖らせた。

「わへ、おじさんたらこいつもそれなんだから」

みつの母親が亡くなり、父親の竹次が店先にみつを置くよになつたのは、みつがまだ3歳のこと。はじめは「泣かないで大人しくしていること」がみつの仕事だったが、次第に注文聞きや片づけ、お運びを任されるようになり、いまや立派に店を回していく。

しかし初めて料理のお運びをしだした頃は、そろそろと歩くみつに、客のほうがハラハラして見ていたものだ。火傷でもしたら大変、と、熱い汁物はみつに持たせないことが当時の常連客の暗黙の了解だつた。かけそばを注文したものは「おみつちゃんに任せてたらそばが伸びちまわあ」と、自ら受け取りに席を立つのだ。

「なあに、おみつちゃんも立派な看板娘になったもんだと思つてよ。なにしろ俺が育てたようなもんだからさ」

みつは苦笑する。この近所には「俺が育てたよつた」自称父親代わりがゾロゾロこるのだ。

おつ母さん、あたしにはおつ母さんはいなけれど、お父つあんはなんだかたくさんいるわ。だから心配しないでね。

「姉ちゃん二つち丼二つだ」

「はあい、ただいま！」

せつかちな江戸の町人たちは、昼飯に時間などかけない。サツとかきこみサツと出て行く。だからいわゆる店の回転が早い。無口な父親が黙々と料理をし、みつが手際よく箸をさばいていく。今日もたけやは盛況だった。

(やつぱまつうちのお父つあんの料理の腕は最高なんだわ)

たけやがあるのは表通りから少し引っ込んだところ。にもかかわらず、密足は途絶えない。父親の竹次の料理はみつの血継だった。

けれどみつは知らない。たけやを訪れる密の田舎ですが、竹次の味ばかりではないことを。

＝＝＝＝＝

昼時の混雑が一段落ついた頃、侍がのれんをくぐった。

「いらっしゃいまし」

初めて見る客だった。狭い店内をキョロキョロと落ち着きなく見回している。

「何にしましょう」

みつが注文を取りに行くと、男が耳を貸すよつ手招きをした。

「あー…ハのやつに聞いたのだが、この店には裏のまかない品があるといつのはまことか」

「…少々お待ちを」

みつは厨房に入り、竹次に客の注文を伝えた。

「お父つつあん、また来たわ。ハツあんて人の紹介だつていつお侍

竹次は手を止めずに返す。

「何だつて？」

「裏のまかない品があるところのはま」とか、ですか」

すると竹次は包丁を置き、前掛けで手を拭うと、小さな紙片に何かを書き付けた。

「今日は食材の用意がねえから、こいつをお渡ししり」

こいつ取りは今に始まつたことではない。時々やつて来るのだ。「ハに聞いた」と言つて裏の品を求める客が。そのたびに竹次は紙片を渡す。一度ちらりと中が見えたことがあるのだが、そこには田時が書かれていた。その田に再訪しる、とこいつらしき。

侍にそつと紙片を渡す。他の客に気づかれないよう配慮しようと竹次に言わせている。紙片を見た客は大抵、まずがっかりしたような顔をする。そのあと別の品を食べて帰る者もいるし、何も食べずに帰る者もいる。今日の客は後者だった。

「ではまた参ると主人に伝えよ」

去つて行く侍の背中を見送りながら、「何ぞ、けちー」と胸の内で

町を出た。

(突然来ても食べられないって、ハつて人もそこまで教えてあげりやいいのこ)

けれどみつは気づいていない。常連客にハなんて男はいないってこと。彼が“裏の品”とやらを食べている姿を見たことがないってことわ。

みつは知らない。この店を訪れる客の中に、竹次の味以外を目的とする者がいることを。そして“ハに聞いた裏のまかない品”が、それを手にするための合い言葉だということを。

みつは知らない。けれどみつの毎日は小気味よく明け暮れしていく。みつはこの店で過ごす毎日が気に入っていた。

=====

今日もいつものように忙しい一日が始まる。店の掃除を終えてひと息ついたみつに、竹次が仕込みの手を止めずに言った。

「おう、みつ。いい加減あいつを起こしてきな」

「ええーっ」

反論するも、聞く耳は持たれない。みつは不承不承、店を出て裏手の自宅に戻った。ドスドスと一階に上る。

「ちょっと、浪人さん！」

「… わの呼び名せやめてくれと書つたわうが」

忙しいながらも平和な毎日が変わったのは、十日ほど前のこと。父娘二人暮らしだったこの家に、居候が住みついたのだ。

「やつと起きたらどうですか、」の居候殿

「その呼び方もなあ……そりやまあ居候には違ひねえが……」

ブツブツ言いながらのつそりと起き上がり、大あぐびをする。ああもう、伸びたヒゲが汚らしいつたら！

「お店開ける前に朝ご飯食べちゃってよ。もう朝でもないってのー。」

「おみつよお」

「何さ！」

「年頃の娘が男の寝てる所にズカズカ入つて来るもんじゃねえぜ?」

「……っ」

カーッと赤くなる。それをいまかよつて、みつばピシャリと言つた。

「男? ビリーハのや。おじさんなら見えたのナビ」

男は心底傷ついた顔で再び布団に倒れ込む。

「ひでえ…そりゃひでえよ、おみつちゃん…」

「ちやんと布団あげて出て来てよー。」

ドスドスと階段を降り、外へ出てパンジャリと腰をしめる。みつば空を仰いでふう、とため息をついた。

「ああむへ、なんだつてんだらひ…」

最近みつを恼ませてるのはあの男の存在…ではなく、彼と対峙するとき故だかケンカ腰になつてしまつ自分。

だいたいお父つつあんが悪い。古い知り合いだからなんだか知らないけど、あたしはもう15になるつていうのにあんな人住まわせるなんて。小さな頃に遊んでもらつたことがあるというけれど、そんなの覚えちゃいない。年頃の娘が心配じやないのかつてんだ。

(…年頃の娘、だつて)

たけやの常連客はいつまでもみつを子ども扱いする者ばかり。いつぱしの娘扱いをされ、少しだけ頬のゆるむみつだった。

「起こしてきました。じきに降りてくるわ」

店に戻り、竹次に報告するが、返事はない。父親の口数が少ないのはいつものこと。けれどちゃんと聞いてくれているのは知っているから、みつも気にせず一方的に話し続ける。

「ねえ、お父つつあん。何度も言つようだけど、年頃の娘のいる家になんだってあんな人住まわせるのよ

すると竹次はちらりと顔を上げ、

「娘？ そんなもんどこにいる。涙垂れなら見えるがな」

「は、ハナタレ！？ 15の娘つかまえてハナタレ！？」

「お前のハナが垂れてよつが垂れてまいが関係ねえ、相手になんぞされねえから心配すんな。第一あれは年増好みだ」

「年増好み…」

オウム返しにつぶやいたみつの頭に、ぽすりと大きな手が置かれた。

「いい。勝手にひとの性癖を決めるな

「やつと起きてきたか。とつとと食つちまいか

竹次が差し出した丼飯に手を合わせ、かきこみながらみつに声をかける。

「おみつちゃん、俺は年増よつもおみつちゃんぐらこのまつがグッと来るからわあ。お茶淹れてくんねえかな」

「そんなの、いつかがお断りだよー。」

ちぐはぐな返事を返して、ドタドタと厨房へ入つて行くみつをポカンと見送る。

「親父、お前さんの娘は何をふりふりしてんだ?」

「俺あお前にやこつを聞いたくてたんだがね」

「……手なんぞ出してねえよ?」

「当たり前だ。出したら今頃お前の命はねえ」

「包一辻井に詠ひ句詞じやねえやー。おつたく…父親がわからねえ
もんをびつして俺がわかるんだ」

「年頃の娘の扱いはお前のほうが専門だひつよ」

「わあー、いやどう年増好みで」わざとあからねえ

カソ!

湯飲み茶碗が呑きつけられるように置かれる。びくっと顔を上げると、真っ赤な顔をしたみつが仁王立ちをしていた。

「おお…ありがとな」

「今度からはびつわ好みの年増に淹れてもうひたべださこつ

さすがに見かねた竹次が茶碗に当たるなど小言を言おうとして

ハア…。

目の前の浪人の、なんだか楽しげに笑んでいる顔に、ため息をこぼすばかりなのだつた。

＝＝＝＝＝

店の中にいるのがいたたまれなくて、きれいに掃き終えたはずの店先でみつはまづきを握る。

(あたしつたらまたキャンキャン騒いでぞ…そんなんだからいつまで経ってもハナタレ扱いなんだわ)

ぽんやりと地面を見ていると、ぽん、と頭に大きな手。

「おう、お茶いひやつさん」

出かけていく背中に慌てて、

「……あ、行つてらっしゃい、新せん」

声をかければひらひらと手を振ってくれる。よかつた、聞こえたんだ。

「もう…頭なでたりとかしないでほしいよ」

小さくなる間にぽつりとつぶやく。このもやもやの原因を、みつは知らない。名前をつければ簡単なことなのだけど。

なでられた頭が熱いのも、気持ちが上がったり下がったり忙しいのも、みんな理由は同じだってことをみつは知らない。

だって、初めての気持ちだったから。

その判断が甘くとも

みつに見送られ、男 新之助は、ある場所を手指し歩いていた。 ゆるんでいた頬を引き締める。

人目につかない場所で、落ち着きなく佇んでいる侍を見つけ、声をかけた。

「ハの紹介つてのはお前様かい？」

「お、おぬしじ？」

「たけやの出前や。裏のまかない品を届けに来た」

「信用できるのだうな？」

「そいつあ信じてもらうしかないが…人に知られたくないのはお互
い様だ。少なくとも口の堅さは安心してくれ」

しかば、と意を決したように侍は口を開いた。

「女をひとり探しもらいたい

「女、を？」

「三田の前に姿を消した

「ひとつの探索はされたんですか」

「内々にほじたが見つからぬ。表には出せぬ者やえ、隠け出るわなにもまいらと」

「なるほど……」

つまりは困い者、妻には知られたくない女なのだろう。新之助は袖の中で腕を組んだ。

「……ひとつ確認しますが、その者が血の意志で身を離してことみるといつ可能性は？」

「ない」

「せひ？」

「あやつは、まつやあ、儂の田の前で姿を消したのじや」

「田の前で？」

「女の家を訪ねた日の」とじや。酒のお代わりを持つてくると言つてゐた。

「女の家を訪ねた日の」とじや。酒のお代わりを持つてくると言つてゐた。

て立ち上がった女が、敷居でつまずいた。アツという声がして振り返ると　もうそこには誰もおらなんだ

「……神隠し、といふわけですか」

「神隠しに遭つたものを何人も連れ戻した者がいる、と聞いてたけやに行つたのだ。おぬし、確かに探し出せるのであるうな」

「何人かは確かに連れ戻しましたがね」

新之助は懐から一枚の紙を取り出した。一枚を侍に示し、読み上げる。

「お代は成功報酬。五日で見つかなければお代は不要だし、探索も打ち切る。その他諸々ご納得いただけたならこちらにお名前を。こちらの紙には、お探しする方の人相風体をできるだけ詳しく記してください」

てきぱきと慣れた様子に圧倒されながらも、侍が紙を受け取る。ああそうだ、と新之助は付け足した。

「私の」とは他言無用に願いますよ。それが条件です

=====

そして夜。

密足の途絶えた夜更けのたけやに、新之助の姿があった。

「それで？」

首尾を問う竹次に新之助が応じる。

「無事解決。あちらに着くなりすぐに見つかったよ。いつもの通り爺さんが保護してくれてた」

「本人は？」

「…かなり取り乱していた。無理もねえがな、忘れたがってるようだつたから、あちらのことをペラペラと言いふらす心配はなさそうだ」

「やうひか」

「それよつこつちま… 変わりなかつたか？」

何も、と言いかけて、竹次は口に運びかけた酒を止める。

「やうこいや、おみつが」

「何かあったのか！」

「お前が帰つて来ねえつて心配してたぞ。すっかり大人しくなつち
まつて。いやおかげさんで今晚は静かに過ごせた、ありがてえ」

ちえ、と困ったような顔をして、新之助は酒をあおつた。

明日の朝は、いつも以上に手厳しく起こされるのだろうか。いや、
でも おかしなものだ。まだ数日しかこの家で過ごしていないと
いつのに、みつの説教がなければ一日が始まらないような氣をえす
るのだから。

＝＝＝＝＝

翌朝。いつものように店の掃除を終え、ひと息ついたみつに、竹次
が声をかけた。

「おひ、いい加減あいつを起こしてきな

「新さん帰つて來てるのー?」

「一階で寝てたろうが。氣がつかなかつたか」

知らないー。とみつは怒りにまかせてドスドスと一階へ上る。その足
音は、新之助の一時酔いの頭にも響いていた そら来た。

「ちよつと浪人さん!」

「…だからその呼び方は…」

「うわ遙くやーー。ひとをやせら心配させとこじま、うれしいよ」

「くえ、心配してくれてたのか。そいつあ光榮だね」

『ひつと寝そべったまま肘をつき、みつを見上げる。

「心配なんかしない！」

言い放つて階段を降りて行くみつの姿が愉快でならない。一方のみつは家の外に出ると、わざと見つめ、「ひ」と言。

「心配なんて、誰がするかつてんだ」

するといこく、

「これ、そこの娘」

突然呼びかけられ、飛び上がる。

「はーー、こらっしゃこまし。お店でしたらもう少しで準備が…」

振り返った先にいたのは侍。と、その後ろには駕籠。ちょっとした身分の人物が乗っていて、この侍はきっと使いの者だということは見てとれた。しかしたけやは、そんな人が来るような店ではない。案の定、侍はみつに向かってひらひらと手を振った。

「店に用はない。」この家に浪人崩れの男はあるか

「え…」

そんなの一人しかいない。けど。みつの目は、駕籠から降りてきた女性に釘付けになった。返事をしないみつに、侍が苛立ちを見せる。

「なぜ答えぬ！」

「これ、大きな声を出すでない」

女性の声に、振り返った侍が「奥方様」と膝をつく。

「あ…あの、新さんなら一階に

「そうか。ならば上がらせてもらひうど。案内は不要じや。そなたも下がつておれ」

ははっと控える侍の声を聞きながら、女性の背中をほんやりと見送る。その姿は、15のみつには逆立ちしたって届かない艶にあふれていって。「立てば芍薬」の見本のような 階段を上っていく姿は差し詰め百合の花か。新さんになんか知り合いがいたなんて。

凝視するみつをびつ受け取ったのが、侍がみつを諭してきた。

「これ娘、の方はやん」となきい身分の御方ぞ。詮索するでない
力チン。

「…その浪人、今起こしてきたところなんですけど、狭い部屋にまだ布団も敷きっぱなしで。あんなきれいな方が足を踏み入れて大丈夫でしょうか…私のような子どもですから、不用意に部屋に入ると何をされるかわからないと注意されているものですから、心配になります」

もつともりしく眉根を寄せながら、侍に小声で告げてやつた。「なんと…」とオロオロと一階の様子を伺い始める姿を尻目に、くるつと背中を向け、べ、と舌を出す。

「冗談じゃない。やんことなき方だかなんだか知らないけど、勝手にひとん家に上がつといて何様だ。だいたい新さんも新さんよ。女の

人に会つなら外でやれってんだ。

(新さんの好みの女の人がて、あんな感じかしら…)

ああ、イライラするつたら！

＝＝＝＝＝

先ほどとは打つて変わつて楚々と階段を上つてくる足音に、新之助は「おや？」とい口酔いの頭を持ち上げた。白粉の匂いがする。

「……どうひさんで？」

身を起こして対峙する。姿を見せたのは、この狭くむさ苦しい部屋には似つかわしくない美女。しつとりとした色香を放つている。にこりと婉然と微笑んだ口元、ちらりと見えた歯が黒いことからどうやら人妻のようだ。しかし全体のやわらかい雰囲気の中で目だけが笑つてない様子は、新之助に緊張感を持たせた。

「注文じゃ。そなたに頼みがあつて來た」

「……この浪人に何をお頼みなさるつてんです？」

「たけや、とやらを通すのも面倒でな。実際の“仕事”はそなたがしているのであつ？」「

仕事の注文はたけやで竹次が受ける。実際の仕事は新之助がする。それは事実だ。しかし新之助の存在は、実際に仕事を依頼した者しか知らないはず。その“力”が悪用されるのを防ぐため、直接接觸されないよう竹次が緩衝材となってきたのだ。

「…何をじこ存じか知りませんがね」

「じらばつくれずともよい。そなたが隠したがつていぬ」とビビもの大体は知つておる」

用心はしながらも、しらを切り通すのは難しそうだと判断する。

「耳敏くていらつしゃるつてわけですか」

新之助の反応が満足だつたのか、女は、ほ、と笑つてみせた。

「そなた、人さがしを生業としているそつだの」

新之助の沈黙を諾と受け取り、女は続ける。

「探し物が得意な者は、隠し物も得意であろうな?」

「さてね」

「そなたに人を隠してもらいたい」

新之助は、じ、と女を観察する。女の表情は変わらない。微笑んだ
ままだ。

「こないだもそんな注文をしてきたのがいましてね。断つたばかり
ですよ」

「ほつ？ 理由を聞きたいのう」

「…美人の頬みは断れねえやな。他言無用に願いますよ？」

負けず劣らずの食えない笑顔で、新之助もまた、表面上は和やかに
対峙する。

「俺ができるのは神隠しに遭った人を探し出すことだ。人を神隠し
に遭わせる力があるわけじやない」

「その手には乗らぬ」

「…と言ひつい？」

「そなた、神隠しに遭った者が集まる場へ迎えに行き、連れ戻して

くるそうだな。つまり自らの意志で行き来できぬところなど。ならば人を連れて行くことも造作ないはずじゃ」

さすがに眉をひそめる。この女、どこまで知っている？ 新之助が持つ力を。竹次が隠し、守ってきた、その特殊な能力を。

「先日注文してきた男といつのは、自分の妻を消せと言つてきたのである？」「……！」

「その妻は私じゃ」

なるほど、それでこの女の情報網に合点が行く。夫のほうの従者に密告者でもいるのだな。その行動は簡抜けというわけだ。

「つまりアンタは夫を消せって言いに来たわけか。犬も食わねえ夫婦喧嘩にひとを巻き込もうつてのはいかがなもんですかね」「さ、夫婦喧嘩と呼ぶのかどうか…しかし私が消してほしいものはあの男ではない」

「では？」

「私じゃ。私をここから消せ」

「なんだつてー?」

ほほ、と口に手をあて、女は愉快げに笑う。

「そなたは断れまいよ。おおかた犯罪まがいの注文を断つたことでの男からの口封じを恐れてここで用心棒をしているのであります。」

「ほんとに…ビリまで耳敏い…」

「下で案内をしてくれたあのかわいいお嬢ちゃんなんぞ、年頃だから心配であるひつねー。」

……断れば、みつに危害を加えるといつわけか。

「しょうがねえな。さつきも言つたらうつ? 僕ア美人の頼みは断れねんだ。詳しく聞かせてくんna」

この女の言う通り、新之助がここで居候を始めたのは竹次とみつを守るためだ。人さがしが商売のはずの新之助のもとに、「人を隠せ」と依頼してきた男。新之助は当然断つたが、男の背後にはカタギではない世界が見え隠れした。口封じや報復の可能性が無いとは言えない。目の前のこの女は、さらに上手を行くようだ。いやしかし うまくすればこの件、まとめてカタを付けられるかもしねり。

それは甘い判断だったかもしれない。けれどたけやの父娘をこれ以

上危険にせりゆことは、新之助にはもつとも避けたいことであった。

新之助が子どもの頃に通っていた道場で、当時子どもたちに剣術を指導していたのが竹次だった。

新之助が8歳のときのこと。その日、他の生徒たちは皆帰宅したあとで、たまたま道場には新之助と竹次の二人きりだった。

「先生、お願ひします！」

「お前もしじぶといな。じゃあこれで最後だぞ」

「はーー。」

打つても打つても何度も立ち向かってくる。そんな新之助の根性が気に入ったのが半分、幼さゆえの無鉄砲をやりこめたい気持ちが半分。竹次は最後のひと太刀をいささか強めに打った。

交わしきれず吹き飛ばされた新之助が、倒れる寸前に後ろ手に手をついた。

(受け身をもう一度指導しなきやならねえな)

そう竹次が思つた瞬間。

「な……！？」

新之助の体が、地面にスッと消えて行った。

「（）いつあ、一体……」

呆然とその場に固まる。数秒、数分経つた頃だろうか。

「先生……」

後ろから呼びかけられ、ギョッとして振り向くと、

「新坊……」

新之助が立っていた。

「お前、一体何をしたんだ？　いま何があつた」

「先生！」めんなさい……」

親にも言つたことがない。誰にも言へず今までずっと隠しておいたの
だと、新之助は泣きながら話し始めた。

いつからかわからなー。

手をかざすと、壁に床に穴が開き、見知らぬ場所に落ちてしまつようになつた。自分の意志で開けたことはない。転んだときや高い所から落れたとき、今のよひひとひじりで受け身を取つた瞬間に、開く。

「『じ』… その穴をくぐり『じ』に行へつて~」

「わかりません。怖くて、こつもすぐ戻つてくるんです。帰りた
いって思つて穴を開けると、ちやんと帰つて来られるんですけど、
いつも、今度こそ帰れなかつたらどうしようつて怖くて怖くて」

泣きじゅく出した新之助を抱きしめ、なだめるよひじりを叩く。
竹次の手も震えていた。

「あの場所つてのは… 一体どんなところだ。地獄か？」

ふるふると首をふる。

「人が住んでおります。顔立ちも言葉も文字も、私たちと変わりありません。けれど身なりがまったく違います。建物も、町並みも」

「俺はてつきりお前が神隠しにでも遭ったものかと思つたが……そいつは神隠しに遭つた者が行く先、ってわけか。いや、しかし……」

つぶやきは、最後はひとりになるとになる。

「先生、私はどうすればよいのでしょうか？」

「俺にもよくわからねえが……手、だな？ 手をつくと穴が開いちまうんだな？」

泣きながら頷く。竹次は腰をかがめ、新之助と田線を合わせて言い聞かせた。

「なら俺が受け身を教えてやる。その力は今後一切封印することだ。これからは、どうすつ転んでも決して手をつくんじゃないぞ、いいな？」

はい、と涙声で新之助が応じ、この日の出来事は一人だけの秘密となつた。

一人はまだ知らなかつた。その穴の行く先の正体を。それが、時空を超えた未来の日本だということを。

＝＝＝＝＝

時のひずみ、といつものがある。

それは何かの弾みで生まれ、また消えてゆく。ひずみにうっかり落ちてしまうと、その場から忽然と姿が消え、「神隠しに遭つた」などと言わることになる。

一方で、自らの意志でひずみを作り出せる能力者といつものもいて新之助がそれだつた。もちろん自覚はない。偶発的に起きる現象だと思っていた。ひずみをくぐつた先がどこなのかもわからない。まさか、そのひずみが時を超えるものだなんて、到底思いもしなかつた。

ただ怖くて、誰にも言えなくて。だから竹次がひとつ策を示してくれたことは、それだけで光明だつた。

それからの新之助は、竹次の言いつけを守り、つまずいても転んでも決して手を突かなかつた。奇妙な現象はパツタリ止んだ。その後、竹次が女房の実家の料理屋を継ぐために道場を辞めていき、新之助の中での記憶はどんどんと薄れていった。

まるで、あんな出来事などなかつたかのようだ。

＝＝＝＝＝

「新一！頼む、助けてくれ」

「先生！」

竹次が道場を辞めてから5年が経っていた。久しぶりに会ったその姿は、髪を振り乱し、汗だくで。

「先生、どうされたんですか」

「みつが…娘が、神隠しにあった

「なんですかー!?」

2年前の竹次の女房の野辺送りで見たのが最後だが、あのとき三つだと言っていたから、今は五つになるはずだった。

「頼む…お前にしか頼れねえ。お前のあの力を貸してくれ。封印しろと言つたのは俺なのに、すまねえが、だが、みつを…あいつまでいなくなつちまつたら俺あ…」

こんなに取り乱した竹次を見るのは初めてだった。是非もない。もちろん協力を惜しむつもりはなかつたが。

「先生、もちろん私も一緒に探します。けれどあの力を、とは、どういふことですか」

「単純に迷子になつたつてわけじゃねえ、みつは俺が見てる目の前でスッと姿を消したんだ。いつか新坊が道場で見せたのと同じだつたんだよ。お前は戻つて来れたろう? だからみつを、連れ戻してくれ。お前しかいねえんだ」

膝をつき、両手をあわせて挙めるようになされた。かつての師匠を見下ろすわけには行かず、新之助も慌てて膝をついた。

「先生、あの現象はあれ以来一度も起きていません。もとより自分の意志で起こしたことなどないのです」

承知の上だ、となおも頭を下げ続ける竹次の姿に、ともかくやれるだけのことはやらねばと、新之助は立ち上がった。人気のないのを確かめ、手近な壁に向かつ。

「どうすればいいのだろう。あの奇妙な現象が起きるのはいつも、身を守るうと咄嗟に手を突いたときで。勢いよく突けばよいのだろうか。塀の上からでも落ちてみるか。」

壁に向かい考へ込む新之助の背中に、竹次が声をかけた。

「新坊、こつちから行くのは偶然だつたとしても、帰つてくれるときは自分の意志だつたんだろ？」

ハツとした。そうだ。いつもどつしていた？　ただひたすら帰りたい、帰りたい、と家を念じて夢中で手を突いていた。ではどうすれば？　記憶にうつすら残るあぢぢを念じてみればよいだろ？　いや、それよりも。

新之助は竹次を振り向いた。

「先生、やつてみます」

再び壁に向き合つて、両手をかざす。田をつぶり、一心に念じた。

(おみつちやんのといひかくー)

タン！　と壁を突く。その手応えは一瞬で消え、そつと田を開けると、そこには大きな穴が　壁に開いていたわけではない。その手前、空間にぽつかりと、穴が大きく開いていた。

「せ、先生……！」

動けぬまま竹次を呼ぶと、すぐに駆け寄ってきた。

「新、お前を危険な目に遭わせて申し訳ねえが、みつを見つけたら戻つてこなきやならねえ。一緒に来てくれるか」

は、はい！ と答える声は、少し上擦っていたかもしない。しかしだただ怖がっていたあの頃よりも、5年分大人になっていた。今は恐怖よりも、みつを探さねばという気持ちのほうが強い。緊張はしていたけれども、はぐれないよう互いの腕をつかみ合つて、二人はひずみをくぐつた。

＝＝＝＝＝

たどり着いた場所は公園だつた。もちろん一人にはそんな呼び名はわからなかつたが。

木々があり、椅子があり、地面は見慣れぬ石のようなもので覆われて平らになつているが、植え込みの奥は土が見えている。日が傾き始めたこの時間、公園内を歩く人は多くない。竹次にはそれほどの違和感が感じられなかつた。

「みつー、ビニにいんだ！」

「おみつちやーん！」

広い公園内を一人で探し回る。ときおりすれ違う人がその姿を見るや、ギョッとして小走りに去って行く。さすがに竹次も、何度もかでそれらの視線に気づいた。

いつか新之助が言っていた。こちらの人々は見た目も言葉も我々と同じ。ただ身なりが違う、と。確かに皆、見慣れない格好をしている。

「先生？」

「いや…」

立ち止まつた竹次を新之助がふり返る。そのとき、薄暗くなり始めた公園内の街灯が灯った。その明るさに竹次はギョッとする。今までみつを探すのに夢中だったが、確かにここは江戸とは違う。一体ここは。

「お前さんたち」

ハツと二人がふり返ると、植え込みの奥から初老の男性が出てきた。

薄汚れた服を重ね着し、髪もヒゲも伸び放題。しかしそんな人は江戸の町にもいる。一人にとつては却つて違和感が小さかつた。

「ひょっとして女の子を探しているのか」

「みつを…娘を知っているのか…？」

血相を変えて詰め寄る竹次に、男性は、みつ、とつぶやいた。

「たけや、みつ、五歳。迷子札にはそうあった

「間違いねえ、うちの娘です！」

「……」

男性は一瞬何かを言いたげな様子を見せたが、ついてきな、と二人に顎をしゃくつてみせた。

＝＝＝＝＝

二人が連れて行かれたのは、公園の片隅。段ボールが並ぶ一角に、男性は案内した。シートに覆われた中を覗くと、薄い布団の上でみつがすやすやと寝息を立てている。

「みつ…」

駆け寄つて胸に抱き上げる。竹次の男泣きに、新之助もまた目を赤くした。

「あらがとうござます。あらがとうござます。」

何度も頭を下げる竹次をおもむ、それよりも、と男性は考える様子を見せた。

「お前たちとは、江戸から来たんだよな？」

新之助がハツとする。

「何が、何が存じなんですね！？ 教えてください、こには一体どこなんですか！」

しかし、それには男性のほうが驚いた。

「それも知らないで來てるつてのか。しかしあんたたちは…いや、このお嬢ちゃんのように江戸から迷い込んで來た奴らは時々見かけなんだよ。だがあんたたちのように、それを迎えに來た奴つてのあ初めてだ。迎えに來たつてことはあっちに歸れるつてことだらう。

あんたたちは好き勝手に行き来できるのか？」

そこまで一気に話してから、いや、と男性は新之助の返答を遮る仕草を見せた。

「互いに質問しあつてたらキリがねえな。いいだろ？、まずは俺の知っていることを話やうじやないか」

二つの間にそんな

江戸から迷い込んだ奴らを時々見かける。そうとわかるのは、俺もそうやってここに来たからだ。

驚いたかい？ もう何年になるかなあ……何かのはずみで気がついたらここに着いてな。俺の場合は幸い世話をしてくれる人に恵まれて、こうしてその田を食つて寝るだけの生活ができている。家も定職もねえが、なに、そんなものは江戸でだって無かつたさ。

ああ、ここがどこかつて話だつたな。ここはな、場所は俺たちがもといた所と同じなんだが……時代が違うんだよ。

わからねえか？ つまりな、お江戸の世から見ると、今いるこの場所は、数十年、数百年経つた未来つてわけさ。

「そいつあ、一体……」

「なに、戸惑つて当然だ。俺も状況を受け入れるまでにずいぶんとかつたもんだよ。……坊主くらいの年だともう少し柔軟かもしれないが」

見ると、竹次がただただ安然としているのとは対照的に、新之助はあごに手をあててじっと考えこんでいた。男性の呼びかけに、顔を上げる。

「いえ、私も驚いてはいますが……ただ、それを聞いていろいろなこ

とに納得がいったのです

「お前、今の話を納得したつてのか！」

「だつて先生、ここの人たちは異国人ではありますんし…かといつて日本の中にこんな場所があるとは思えないし…他に説明がつきません」

うーん、と考え込む竹次から視線を移し、新之助は男性に尋ねた。

「時代が違うというのは、何年くらいなのでしょうか」

「さて…暦が違うから正確にはわからないがね。いま世界でいちばん長寿だという男性が120歳近いんだが、そいつも俺よりずっと年下のようだ」

ひやくにじゅう…、そつづぶやく新之助に、今度は男性が尋ねた。
さあ坊主が答える番だぞ、と。

新之助は、自分に起きたことをわかる範囲で説明した。時々偶然こちらに来てしまっていたこと。江戸に帰っていたこと。今回初めて自分の意志でこちらに来たこと。当然、仕組みも理由もわからないところなどを。

「そんなことがあるもんなんだな…。で、そのお嬢ちゃんを連れて

三人で帰るつてわけか

「はい。あの…あなたも、一緒に行かれますか？」

新之助の申し出に、男性は一瞬目を丸くしたが、すぐに首を振った。

「いや、俺はあちらに戻るつもりはねえ。戻ったところで家もねえ、家族も仕事もねえときちや、ここにいるほうがいいからマシだよ」

「そうですか…」

「それよりもな、坊主に頼みたいことがあるんだ」

「頼み、ですか？」

ああ、と頷いてみせ、男性は居住まいを正した。

「俺は江戸へ戻るつもりはない。だがな、うつかり迷い込んでいた奴らをどうにか戻してやりてえのよ」

「おみつちゃんのような子を、ですか」

「小さな子ならまだ、本人も状況がわからないし、養い親に会えることもある。本当に哀れなのは大人のほうだよ。発狂せんばかりだ。だからな、坊主のその力でなんとか助けてやっちゃあくれねえか

頭を下げる、新之助は顔を上気させた。訳のわからない自分の力がひとの役に立つかもしれない、という事実は、少なからず新之助を興奮させた。13歳という子どもと大人のはざま。若者らしい義侠心で身を乗り出す新之助に、一方で冷静な竹次が口をはさんだ。

「いや、こいつはまだ力を使いこなしているわけじゃねえ。娘を助けてもらつておいて言うのもなんだが、あまり期待はしねえでくんな」

「先生！」

水をさすような言い方が、新之助には理解できなかつた。人助けだというのに、なぜ？　しかし竹次は別のことを探していた。

新之助の持つ特殊な力が人の口の端に上れば、必ず悪用を企む者が現れる。その力でみつを助けてもらつておきながら、今後は封印しろというのが身勝手なのはわかっている。しかし自分たち父娘がきっかけを作つてしまつたからこそ、新之助を守る責任があるので、竹次は考えていた。

「私はぜひ協力したいです」

「安請け合いはよしておけ」

どちらの気持ちも理解できる。野性さつとつと頷いてみせた。

「なに、迷子つたつて一年にひとりか二人いるかどつかだ。もしまつかりこちらに来ちまうよつなことがあつたときに、俺のところに寄つてくれたらそれでいい。そのときに俺がまた誰かを拾つていたら、一緒に連れて帰つてやつてくんna」

「ここに来ればあなたに会えますか」

「そつわな。追い出されさえしなけりやな」

「私は井原新之助と申します。あなたのお名前は？」

「喜ハ…ハ、と呼んでくれりやい」

=====

それからといふもの、渋る竹次を説き伏せ、新之助は時のひずみを作る練習をし始めた。数か月も経たないうちに自在に扱えるようになり、ついに迷子をひとり連れ帰ってきたのを知つたとき、よみやく竹次も諦めをつけた。

賛成はできないが、新之助が本気なのなら仕方がない。ただし約束しろ。決して自分の正体を明かすんじゃねえ。代わりにたけやが表に立つ。

そうして新之助は頻繁に喜八の元へ通うようになった。はじめは喜八が保護した者を連れ帰るだけだったのが、どこから聞きつけたものか、次第に探索の依頼が舞い込むようになった。

どうせ次男坊で継ぐ家もないからと、新之助はこれを仕事にすることにした。いくらか金を取つたほうが後腐れがなかろうといつ理由もある。

もちろん依頼はそんなにショッちゅう起きるものではなかつたし、探索料も依頼者が無理なく支払える程度の額にしていたから、食い扶持を稼ぐまでには至らない。新之助は、かつて自分も通つた道場で師範を手伝つことで生計を立て、その傍ら、密かに神隠しの探索を行つてゐるのだ。

そんな新之助の生活を苦々しく思いながらも、竹次は自分が表に立つことで新之助を守つてきた。

もう師匠でもないから、と、「先生」という呼び名を竹次が断り、三日間悩んだ末に新之助が決めた「親父様」という呼び方が、いつしかただの「親父」に変わり。さらに2人の間に敬語がなくなつても、その関係はずつと続いてきたのだった。

竹次が心配していたことがついに起きたのは、半月ほど前のこと。新之助に対し、人探しではなくその力を使って人を消せ、と依頼し

＝＝＝＝＝

てきた者がいたといつのだ。当然断つたが報復でもされたらことだ、しばらくここで守らせててくれ 新之助のそんな申し出で、居候が始まつた。

みつの反応には内心驚いた。あいつもいつぱしに男に頬を染めるような年齢になつたのかと思う。しかしそれよりもっと意外だつたのは、新之助がそんなみつを見て、まんざらでもないような顔を見せることだ。本当にあいつらはいつの間にそんな歳になつたんだか。

竹次は包丁の手を止めて店先に目をやつた。

そのみつは、新之助を起こしに行つたきりなかなか戻らないと思つたら、今度は店先でちらちらと家のほうを覗いて落ち着かないでいる。

「いい加減にしねえか、鬱陶しい。新はどうした？」

ふり返つたみつは、唇をとがらせて、

「新さん、お客様だつて」

「…客だあ？」

みつの答えを、竹次は訝しだ。新之助は自分がここに寝泊まりしていることを明かしていないだろうし、たけやの常連たちは一階の居候の正体を知らない。つまり新之助に客など訪れようはずがないのだ。

「客つてなあ一体誰だ」

「…百合の花」

「ああ？」

「知らない人！」ここに浪人はいるかつて、お供の人まで連れてんの」

「供を連れた女…？ 新之助の家の者か？ いや、妙齢の女なんぞいないはず。第一名前を言わずに訪ねて来たといふのは怪しい。

「誰かれ構わず通すもんじやねえよ」

「止める間なんてなかつたもん！ 下がつておれ、とか言つちゃつてさ。やんごとないか何か知らないけど何様よ」

身分のある女、か。竹次のなかで不安が頭をもたげる。様子を見に行こうかと厨房を出かけたとき、店の入り口から新之助が顔を覗かせた。

「親父すまねえ、朝飯はいいわ。遅くなつちまつたからこのまま道場へ行く」

「お前…」

気遣わしげな目線を送る竹次に、大丈夫だと同じく目で答え。ついでのようにみつの頭をぽんぽんと叩いて、新之助は出かけて行った。たけやの父娘それの胸に、不安を残して。

あたしはもう決めてるから

道場へ向かう道すがらも、新之助の頭の中は先ほどの女のことでつぱいだった。やり取りを何度も反芻する。

「さ、聞かせてもらおうか

「言つた通りだ、私をここから消せ 5 口経つたら戻してもうおう」

「都合のいい話だな。そつ簡単に行つたり来たりできぬつて？」

「できるのやあ？」

「……それで？ あちいらでビリ過いりやつもりだ。ビリまで知つてんのか知らねえが、アンタが身を置くよつな場所はねえぜ」

眉をしかめて見せた新之助に、女はなおも婉然と笑う。

「つうに珍しいのがいてな。神隠しに遭つたことがあるところのだ

「…ほう？」

「それも、たどり着いた先で助けられて、三度ほど過いりしたそつだの。」じりじり戻るときには涙の別れだったそうだ

「……」

新之助は再び眉間にしわを寄せる。その光景には覚えがあった。昨年末だったかに連れ帰った若者だ。あちらの人と親しくなつていて、無事に帰れてよかつたと涙ながらに見送られていた。珍しいことだつたのでよく覚えている。あの男、この女の家に仕えていたのか？

「その世話になつた人に頼めば、数日くらい置いてくれるだらうと言つのでな」

「するてえと、その男も一緒に行くつてことか？」

「人数制限でもあつたか？」

「いや……一、三人なら……」

問題は人数などではなく。

渋面を作る新之助に、女はわざとらしく、ああ、と付け足した。

「そなたのことは他言無用だつたそうだが。許してやつておくれでないか？あの年頃だ、誘惑に勝てぬこともあります」

……色が、金か。いずれにせよ何かで釣つたのだろう。忌々しい。

なるほど、夫よりも詳しいのはそこに情報源があつたのか。

「で？ 実行は？」

「明日の夜」

明日の夜。さつきは5日行方をくらますことで何を得ようとしているのか。夫を心配させたい？そんな可愛いもんじやないな。では手下に捜索願いでも出させて、夫に罪をかぶせるか。いずれにしても、夫のほうにももう一度会わねばなるまい。報復を警戒した時点で素性は調べてある。今日中に打診をしておいたほうがよいか、あるいは動きを探られないよう、女をあちらへやつてから動くべきか。

「！」

1

考えに夢中になるあまり、反応が遅れた。目の前に竹刀があり、反射的になぎ払う 我に返ると、生徒が床に転がっていた。そうだ、今は稽古中だ。慌てて抱き起こす。

「すまねえ、ケガはないか？」

少年は頭をさすりながら起き上がり、両手をつべ。

「参りました」

「バカ、何言つてんだ。今のは俺が悪い。どれ見せてみる」

おでこのたんじぶをそっと撫でる。なんてこった。気を散らした挙げ句ケガをさせるなござり、言語道断じやないか。

「悪かつたな、許してくれ

後ろめたさで反省しきつの新之助に、そつとは知らない少年はきよとんとするばかりだった。

=====

「癌にならなければいいがなあ

新之助は少年を家まで送つて行くこととした。濡らした手拭いで額を押さえさせ、少年の荷物は新之助が持つてやる。心配そうに覗き込む新之助に対し、少年は少し口をとがらせた。

「額にこぶを作ったくらいで先生に送つていただいでは、家の者に叱られます」

そう言わると、少し大きさだったかといふ気になつてくる。いやしかし。

「そのこぶはお前が未熟なせいじゃねえ、つてのは、きちんとこぶ親に説明しないとな。俺の不注意でケガさせたわけだし。母上もびっくりなさるだろ？」「

母、と聞いて、少年は何か言いたげな顔をしたが、結局口をつぐんだ。その横顔を見やる。

みつよりも少し年下だらうか。子どもと呼ぶには少し大人びたいや、そうあうと背伸びをし始める頃、だらう。ちょうどあのときの自分と同じくらいか。

少年の赤い頬を見ながら、新之助はしまつておいた記憶を取り出す。神隠しに遭つたみつを竹次と二人、探しに行つたあのとき。13歳だつた。その力を貸してくれという喜八の申し出を、もう少し子どもだつたら受けなかつただろう。あと少し大人だつたとしても。

後悔はしていないが、止めどきを見失つてしまつたのは確かだ。助けを求められれば断れない。しかし、他人に言えない仕事をいつま

で続けていけるものか。俺だって所帯へりこ持ちてえや。

そんなことを考えながら歩いていると、突然少年の顔がパアッと輝いた。

「叔父上！ 今お戻りですか」

「叔父上？」

「はい。私は両親ではなく、叔父と住んでいります」

前方を見ると、家の前で若い武士がこちらに会釈をしていた。慌てて返す。少年が駆け寄ると、叔父といつ男性は額のじぶに手を止め、「ヤリとした。

「じつしたその顔、派手にやつたなあ」

「はい。それで井原先生が送つてくださいました」

井原、とつぶやき、じつといひを覗く。

「お前…新之助か」

名を呼ばれ、あつと声をあげた。

「勘さん！」

少年が一人の顔をキヨロキヨロと見ながら、

「お一人はお知り合いでですか」

「ああ。子どもの時分に道場で一緒だった。久しぶりだな、新」

それは新之助が道場に稽古に通っていたころ、何かと面倒を見てく
れていた兄貴分。勘右衛門だった。ちょうど竹次が辞めたころに、
勘右衛門もまた、奉行所の仕事についたため道場に来なくなつたの
を覚えている。

「こりやあいい。新、ちよいとつきあえ。おう、俺は新之助先生と
一杯やつてくつから、お前はそのおでこを冷やしてな」

「はい。先生、ありがとうございました」

新之助から荷物を受け取り、一礼して家へ入つていいく少年を見送る
と、男二人は呑み屋へときびすを返した。

＝＝＝＝＝

「久しぶりだな」

「本当に。……いつの間に子供も作ったんですね？」

ハシリ、と頭をはたかれる。

「阿呆。甥っ子だ、甥っ子。ちょっと事情があつてな、うちに暮らしてんだ……。そういうや時々若い先生が教えに来るつてあいつが言ってたが、まさかお前だとはね」

「たまに代稽古をやらしてもらつてんだ。普段は雑用係ですよ」

酒が入り、新之助の敬語がほどけてくる。そつかそつかと上機嫌で酒をあおる勘右衛門の手が、そついえば、と止まった。

「お前、竹次先生とは最近会つてるか？」

「……店にはよく行きますよ。たまに食いに行つたらどうです？ 今やあの界隈じゃ人気店だ」

「たけや、か。その店で裏の商売をしてるつてえ噂は？」

「……。」

核心をつかれたその一瞬の動揺を、勘右衛門は見逃さなかつた。

「……お前も関わつてんのか」

「……」

「じこまで明かしてよいものか。言葉が継げなくなつてゐる新之助に、勘右衛門は苦笑とともに肩を叩いた。

「なに、お上が取り締まろうつてわけじゃない。ただ、危ない目に遭わねえかつてのが心配なだけだ」

「それは大丈夫です。あの父娘に手出しさせない」

新之助の即答に、勘右衛門の片眉が上がる。

「つまり手出しされる可能性があると?..」

「つ……」

再び言葉につまる。勘右衛門は新之助の肩においてたままの手を、ぽんぽんとはづませた。

「言える範囲でいい、話してみな」

＝＝＝＝＝

聞き上手の勘右衛門に、すっかり引き出されてしまった。もちろん「時のひずみ」の話は伏せている。ただ人探しを副業にしていて、いま厄介な案件を抱えているのだということだけ。

「ふうん……福田家か。駿河台のだらうへ、

「知つてんですか？」

「ああ。なんとなく読めた」

「とこりうと？」

「うん、とひとつつなづき、酒で口をじめたりせん。

「福田の当主にはつきあいの長い女が外にいる。だがな、あそこは入り婿だ。おいそれと離縁はできねえってわけだ」

「だから妻を神隠しに遭わせろって？」

「ああ。不可抗力で“致し方なく”別れようつてんだる」

しかしあからないのは女のほうだ。

「気にくわないなら夫を追い出しゃいこものを。何を企んでんだか」

「やういう事情なら、姿を消せば夫は嬉々として“行方知れず”と届けを出すだらうな。それを女がどう利用しようつてのか……」

「きな臭えな。なあ新、今からでも手を引いやぢりだ」

「やういうわけには行かないよ」

なにせあの女は、みつの顔を知っているのだ。

「…まあ、今の話だけじゃあ奉行所は何も手を出せねえが。俺も気になる。それとなく伺つておくよ」

あまり無茶するじやねえぞ、という勘右衛門の言葉に送られ、新之助はたけやへ帰つて行つた。

日が暮れたとはいえ、まだ早い時間だった。たけやに戻り、家へ入

＝＝＝＝＝

ひつとすると、玄関先でみつが待ち構えていた。壁にもたれかかり、マジックと顔をしかめている。

「…おかれりなさ」

「おひへ…店は？」

「わらわ酒の時間」

たけやでは夜になると酒を出す。その時間帯は、みつは店に出来るいとを許されていない。子どもが酒を扱つた、と竹次に言われ、みつはひと足先に家に戻るのだ。

「わらわか。『苦勞さん』

こつものかい、まんぽんと頭に置いつとした手を、みつはわっとよけた。

「新さん」

「ん?」

「新さんせ、ああいへ、百合の花が好きなの?」

「はあ? 百合?」

なぜ急に花の話が出てくるのか、と聞いかけて　　ああ、今朝の女のことを気にしているのかと気がつく。

「やうだな。俺あ百合みたいな気取ったのより、その辺に咲いてるよつのほうが好きだな」

「やう…なんだ」

「ひとなく嬉しさうひふやく姿に、つい余計なことを聞いてしまつた。ほひ酔いのせいだ。

「やうこりおみつひやんはびつなんだ。お嫁に行くなりひこりのが好きなんだい？」

「ばかーと、また真つ赤な顔でふくれるのかと思こいや。返つてきただけにひこうのは穏やかな笑顔で。

「あたしはもう決めてるから。お嫁に行く先

「……へえ?」

それは意外なほどの鈍い衝撃だった。

「いっぴしに、いい人がいるのか」

「そんなんじゃないよ」

ぽーんぽーん、と地面を蹴る足元に視線をやつたまま、みつはまく。まく。

「あたしはね、お嫁に行ってからも、たけやでお父つあんの手伝いをさせてくれる人のところへお嫁に行くの。だからお店をやつてる人はダメ。だって向こうの店を手伝わなきゃいけないでしょ?」

…ああ、やうこひとか。つまり、

「おみつはお父つあんが好きなんだな」

わかんないけど、ヒ、わざと首を傾げてみせるその頭を、今度こそぽんぽんと叩く。わつき、一瞬じきとしたのは何だったのだらう。

「そんなら、料理人と夫婦になつて、亭主にたけやを継いでもうつのかい?」

しかし、みつはまくとする。

「それは……考えもしなかった……。たけやの厨房にお父さん以外の人が立ってるなんて、考えたことないもの」

「そりか。じゃあ

「

……

「 もう、ばか！」

パタパタと家に駆け込んで行くみつの背中を、呆然と見送る。俺は今、なんて言った？

じゃあ、俺は包丁を覚えなくともいいのかな。

何言つてんだ、俺。

ふう。

先ほどまでみつが寄りかかっていた壁に、背を預ける。少し、酔いを覚ましてから家に入ろう。

わかるもんか

翌朝。

珍しく早起きの新之助に、竹次が仕込みの手を止めた。

「……なんだ珍しい。今日は雨か?」

「いや、ちょっとな」

なんとなく、みつが起こしに来る前に起きよつと思つてしまつた。
当のみつは、ムスリとした顔で机を拭いていたかと思つと、入れ替
わるよつに外へ出でしまつた。

ちよつといい、と、声を潜めて竹次に告げる。

「今夜は遅くなる。ひょつとすると戻らないかもしねえ」

竹次は眉をひそめた。

「例の件か?」

「ああ」

手短に事情を説明すると、竹次がますます没面になる。苦悶を聞かされるだらう」と見越し、それを遮るより新之助は話題を変えた。

「わつこやあ昨日、勘さんと会つたよ」

「勘……勘右衛門か！」

「うん。道場の生徒に甥っ子がいたんだ」

「わづか……あいつも奉行所の仕事が板についた頃だらうな

「ああ。飄々としてゐるへせに、田代とこつては耳せどこ。すっかり
聞き出されちまつた……それで、な。たけやの裏商売のこととも知つ
てたよ」

竹次が視線を上げる。新之助は続けた。

「あちらのことは伏せておいたが、今回の厄介」とについては話した。何かあれば力になつてくれると思つ

「なあ新。今度のことがカタついたら、もう終つてしまふやあどうだ

そうか、とつぶやき、黙々と作業を続ける。そして手元を見たまま、

「親父…」

「これでわかつたろう? ただの人助けの域を超えている」

「わかつてんだ、無茶してるのは。けど、本当に向こうに迷い込んじまう人がいる以上、助けてくれと言われてそれを断ることはできねえじゃねえか」

互いに互いの言い分がよくわかる。ほつきを手にしたみつが店へ入ってきて、その話はそこで中断された。

＝＝＝＝＝

その晩。

約束どおりの場所で、新之助は例の女と対峙していた。後ろには供が一人。たしかに以前、新之助が助けた男だった。気まずそうに目をそらしている。

「迎えに行くのは5日後、だな?」

女は悠然と頷く。ひずみを開けるべく宙に手をかざしかけ、新之助はさらに問うた。

「それで これからに送り届けた途端に口封じ、なんてのはナシだぜ?」

「なんの、立場の危うさで言つた『私の』不安だ。迎えに来て置き去りにされないとも限りないからな」

内心、ため息をつく。そしてやりたいのはやまやまだよ……。

「例のじこととのところへ送る。迎えに行くのもやだ。いいな?」

今度は供の男に尋ねる。場所の確認をし、新之助はがざした手に意識を集中させた。

「ハツ」

『気合』を入れるとともに、空中に六が開く。ふう、と息をつき、

「や、これをくぐればこちらの世界からは影も形も無くなる。じー
れんに伝えたから、一旦は俺も一緒に」

「新さん……？」

聞き慣れた声に喉がつまり。
恐る恐る振り向く。
目を見開く。

そこにいたのは、いるはずのない、

「おみつ…お前、どうして、ここに…？」

=====

今日は夕方で店を閉めるから、先に帰らず残ってる。父親にそう言われ、みつは首をかしげた。

夏が近づき、陽が長くなってきて、仕事帰りに一杯寄つてから帰る職人が増える時期だ。書き入れ時と言つたら大げさだけど、酒を出さずに夕方で閉めてしまつてはもつたいんじゃないんじやないの？

それが新之助の不在と関係しているなんて、みつの身を案じてのことだなんて、思いもよらない。

客足が途切れ、のれんをしまう。店には長つ尻の客が一人残つているだけだった。こういう場合、普通は先に帰させてくれる。終わるまで待つてろつたつて、その客以外の片づけはもう済ませた。暗くならないうちに湯屋に行きたいし しごれを切らし、みつは父親に合図をして一人店を出た。

湯屋、つまり風呂屋に向かっていたところで、声をかけられた。昨

日、新之助のもとを訪ねてきた女の従者だ。

「あ…昨日の」

「おぬしを迎えて行くところだったのだ。新之助、と言つたか。あの男が今奥方様のところにいてな。おぬしに来てほしこと申しておる」

「新さんか！？」

「ひむ、困つておるよひじや。助けてやつてくれぬか」

自覚は無くとも好きな男だ。頼られるのは正直うれしい。が。

「あの、そもそも新さんと、その奥方様とは一体どうして…？」

「詳しことは言えぬが。奥方様のお困り事を、新之助に解決するよう依頼しておるのだ。今晚その作業をするはずだったのだが、新之助の具合がちと悪くてな」

「具合が？ 大変！」

「ひむ、それでおぬしを呼んでくれと」

新之助の具合が悪い。みつの頭はもうそれでいっぱい。ほら、昨夜お酒飲んでたし、今朝もやけに早起きだつたし、どうかおかしかつ

たんだ。

「参ります。ちよつと、お待ちください。一度家に戻つて父に伝え
てきますから」

「ああそれには及ばぬ。」ちらから使いを出すから、おぬしは「
で駕籠に乗れ。できるだけ早く着きたいのだ」

たしかに、今から家に戻つていては時間がかかる。帰りが遅くなつ
たとして、新之助と一緒に帰れば問題ないだろ。そんなふうにし
か考えなかつた。

連れられていったのは、ある屋敷。男のあとについていくと、部屋
の中からボソボソと話し声が聞こえてきた。新さんだ……！

「——ひに送り届けた途端に口封じ、なんてのはナシだぜ？」

口封じ？ 物騒な台詞にそつと部屋を覗く。新之助が、宙に手をか
ざしていた。何を、しているんだら。ちらりと見えた横顔は、み
つの知らない真剣な顔。少し怖くて、少し素敵で。やがて氣合いの
声とともに、空間がグーヤリと歪んだ。今、何したの。

「あ、これをぐぐればこの世界からは影も形も無くせる」

「新さん…？」

思わず呼びかけてしまった。振り返った新之助は驚愕の表情。

「おみつ…お前、ビーフシチュー…？」

かすれた声で問われ、困惑する。だって、新さんが呼んでるっていうから。

新之助の問いに答えたのは、女だった。

「一人では心細くての。お嬢ちゃんに一緒に来てもりおりと思うてな」

「ンだと…？」

「お嬢ちゃんがいれば、そなたも迎えに来るのを忘れまい」

「てめえ…！」

みつには状況がさっぱりわからない。ただ、新之助がひどく怒っていることだけがわかつた。

「新さん、『じめんなさい』。あたし来ちゃ行けなかつた?」

「いつと、新之助はみつを振り向き、心配そうな表情をした。怒つているわけではないのかと、少しほほつとする。すると女がさう元に

「お嬢ちゃんを叱らないでやつておくれ。『新さん』が困つていて、助けてあげたくて来たのだもの」

「みつに手H出しあがつたりだりなるか、覚悟してのことだらうな?」

「なに、手駒を等しくしたまでよ。あまりにもこちらに不利過ぎたのでな　お嬢ちゃん、すまないが、私の供をしておくれでないか?　女手が足りぬでの」

戸惑つみつを制し、新之助が構える。

「行かせるか!」

しかし、新之助は一ヤリと笑む女の唇を見たのを最後に、意識を失つた。

「や、参りつか」

「新さん！ 新さん、大丈夫？」

部屋にいた男に手を引かれ、ひずみに連れ込まれる間も、みつは必死に新之助に呼びかける。

「大丈夫、気を失っているだけだ。5日後には迎えに来てもらわねばならぬからな」

「迎えに…？」

そこで初めて、みつは自分の置かれている状況を見た。どこかへ行く、と言っていた。だのに部屋の入り口ではなく奥に向かっている。先にあるのは、先ほど新之助の手から生まれた、グニャリとした空間。何だろう、これ。そして

足元がグラリとして、みつもまた、意識を遠のかせた。

ぱしぱし、と頬に軽い刺激を感じた。

＝＝＝＝＝

「おい、新。どうした、大丈夫か？」

ほんやりと目を開けると、竹次がじみを覗き込んでいた。焦点が

あい、意識が戻る。新之助は飛び起きた 飛び起きよつと、した。

「ツツー……」

後頭部がズキリと痛む。やられた。

「大丈夫か？」

「親父、おみつは？」

「湯屋へ行つたらしいんだが戻らなくてな。様子を見ようと出てきたら、お前が行き倒れてた……何があつた？」

思わず目をとじる。一番避けたかったことを防げなかつた。新之助は身を起こし、竹次に向かつて手をついた。額を地面にこすりつける。

「申し訳ありません！」

先ほどのことを説明する。しかし竹次は、表情こそ厳しかつたが動搖はしていなかつた。

「その女の言い分に沿うと、少なくともお前が迎えに行くまでみつ

は無事だろ？

「そん…そんな、無事つたって怖い思いして」

「なに、あいつは肝つ玉が据わっているから大丈夫さ」

それで、どうするつもりだ？ 竹次に聞かれ、新之助は顎に手を当てた。

本当ならすぐにでも迎えに行つてやりたい。しかし、居場所を探している間に約束の5日になつてしまつては意味がない。あの女の企みを成就させるなんぞ、こいつなつた以上、絶対に許さない。

「親父、俺は今から女の亭主に会つてくる。女の企みをぶつ潰してやつて、それからおみつを迎えに行く」

言つが早いが、もう走り出していく。

「おいつ」

竹次の制止など耳に入らない。夜の町を走りに走り抜け、田的の屋敷にたどり着く。両手をひざにしき、肩で息をしていると、その田に男の足が見えた。乱れた息のまま顔をあげ ニヤリとする。

「やあ、お目にかかるて光栄ですよ」

「貴様、何しに来た」

たまたま出先から戻ってきたこの屋敷の主人、つまり、あの女の亭主だった。

胸が、痛い

「　あいつが神隠しに遭わせると?」

男　　福田左門の屋敷に招じ入れられ、新之助は事の次第を話した。

「ああ、あんたが以前俺に依頼したようにね。奥方様は自分を消せと言つてきたんですよ　ただし5日の期限つきだが」

じつと考え込む素振りを見せた男に、新之助は続ける。

「亭主の意を汲んで自ら姿を消そうってんですかね」

「そのよつな殊勝な女に見えるか?」

いいや、ちひりとも。肩をすくめてみせると、男は手を叩き女中を呼びつけた。

「つくはおるか」

「奥方様は本日、『実家においてになりまして、まだお戻りではありません。ひょっとしてお泊まりであろうつかと、先ほど問い合わせに行かせたところで』『ぞこます』

りく、というのが女の名前なのだらう。すると、廊下をバタバタと走る音が近づいてきた。

「旦那様、失礼いたします、旦那様！」

新之助からすると背中側にあたる廊下に、男が膝をついたのがわかつた。

「松田か。何事じゃ」

「は、ただいま奥方様の『実家に参つたので』ぞりますが、本日はおいでになつていないとの由」

「ほつ」

「利吉が供をしておつたのですが、奴の行方も知れません。何事かに巻き込まれたのではないかと…役人を呼びに参るお許しをくださいませ」

新之助の目に、左門がニヤリと口の端を上げたのが見えた。

「いや待て。今夜ひと晩は様子を見よつ。届けを出すのは明日でよい

「やのよつな悠長を むー むぬし…」

松田と呼ばれた男が新之助に気がつき、声を擧げる。振り向くと、それは先ほどみつを連れて来た男だった。おそらく、新之助を背後から襲つたのも、飛びかかりたくなるのを、拳をグッと握つていたりえる。

「儂の客人になんぞあるか

「は？ あ、いえ…」

動搖する男に、左門は面倒をひらひらと手を振る。

「とにかく、今夜は下がれ。明日の夕方まで待つても戻らなければ、探索の願いを出せんや。どうぞ男と逢に引きでもしておるのなら、騒ぎ立てては帰つづらくなるやうのやうかいの」

「な、何をおっしゃいます。奥方様に限つてやのよつな

「聞けなんだか？ 下がれ」

ピシャリと書かれ、男は漠々と去つてこぐ。そして。

「エハヤアおぬしの言つたことには出しこようだ。それ、エハツしたものかの」

「行方知れずになつたと知れば、あなたが喜んで届けを出すと奥方は踏んだのでしうが」

「おぬしの話を聞く前ならやうしたであらうな。しかしおれいく……“奥方行方知れず”を公にしたときが、奴らが動き出す機なのであらう」

左門はしばし考え込むと、何かに思い至つたよつてニヤリとした。立ち上がり、新之助に告げる。

「明日の夜、また来い。おぬしの知りたい答えがわかるだろア」と

「どうこいつ」とだ?」

「あやつの企み、読めた」

「…エヒつは……」

とにかく明日だ、と追い払われ、新之助は仕方なくたけやに戻る。みつを思えばできるだけ早く片を付けたかったが、しかし、中途半端なことをしては片付くものも片付かない。みつに危害は加えられないだろア、という竹次の読みを信じるしかない。

……今夜、みつは大丈夫だらうか。今さら泣いてやしないだらうか。

新之助の胸は、たまらなく痛む。

＝＝＝＝＝

みつが連れて行かれたのは、一軒の民家だった。一緒にいたのは、新之助を訪ねてきた“百合の花”と、初めて見る若い男。夜なのに町は明るく、見たことのない景観に、みつはキヨロキヨロとしてしまつ。

みつは当然、そこが150年後の江戸だということは知らなかつた。みつだけではない。企てた張本人 福田左門の妻・りくもまた、ただ異世界としか知らなかつたため、少なからず動搖をしていた。もちろん、おくびにも出しあしなかつたが。

みつは、しかし怖い、とは思わなかつた。若い男がそつと「無事にお返ししますから」と囁いてくれたし、家主の老夫婦はとてもいい人たちだつた。男との再会を喜び、みつたちを「姉と妹」だとした見え透いた説明も、疑わないほどに。

用意された布団に寝転がり、天井をじつと見る。みつが気になつてゐるのはそこではなかつた。

初めてではない、と、思つ。ひずみに落ちる瞬間の、あのぐらりと来る感覚を、遙か昔に経験したことがあるような気がする。けれどそこでたどり着いた先はまったく記憶になくて。

(パリは、どこなんだう)

前にも来たことがあるのだろうか。思い出せない。ただ いつか迷子になったことは覚えていて。お父つあんがひどく心配してい て、そして 。

田を開じる。

お父つあんは心配してやしないかしら。
新さんは、怒つてやしないかしら。

よくわからぬけれど、あたしはきっと騙されていて、それで新さんのがヤマをして、あんな田に遭わせて。馬鹿だ、あたし。怒つて るかしら、新さん……愛想尽かされたかしら。

胸が、ギュッと痛い。

=====

翌日。夜まで何もせずにいられなかつた新之助は、勘右衛門を訪ねていた。左門とのやりとりを説明する。もちろん、みつのことは伏せたままだ。時のひずみのことは、最後まで明かさずにいたい。

話を聞いた勘右衛門は、自分も福田の屋敷に出向くと言つてくれた。福田家から、内儀の行方知れずの届けを受け取り次第、駆けつけてくれるという。

何が起きるかはわからない。しかし、何かあつたときには自分の身を守らねば。新之助の他に、みつを迎えてやれる者はいないのだ。

そして、夕方になつても戻らぬ妻を、ついに左門は役人に届け出た。探索が始まる。しかし夜通し待機するわけではない。夜更けには灯りが消え、屋敷の主人は寝静まつた。

カタリ、と、よほど耳を澄まさなければ聞こえないほどの音がして、天井裏から人影が降りる。左門の寝ている布団に近づき、胸のあたりをしのばせていた凶器でひと息に突く　が。

「！」

想像していたのとは違つ感触に、布団をめくる。そこにいるのが布切れを丸めた人形だと気づく寸前、背後からピタリと刃物を当てられた。

「動くな」

同時に部屋の戸がスパンと開き、勘右衛門が手下を従えて新之助と共に乗り込む。侵入者に刀を突きつけていたのは、屋敷の主・左門だ。

「誰の指図だ?」

「……」

「まあ聞かずともわかるが

刀が背から首筋に移る。

「…雇われだ。首謀者は知らぬ

フン、と鼻で笑うと、刀はそのままに、今度は勘右衛門に声をかけた。

「あとは預ける。調べれば必ずりくにつながるはずだ。直接の指図は松田であろう」

勘右衛門は侵入者を取り取り、縄をかける。それを引っ立てながら、

「念のため、数名を残して置きます。」用心を

「あの女にしては考えたが、所詮、浅知恵だ。何重にも仕掛けて
おるまい」

勘右衛門を見送り、新之助は改めて左門に問う。

「つまり　奥方のねらいはアンタの命だつたと？」

フン、と再び嘲笑をもらす。

「夫が殺されよつと、神隠しの最中では疑いはからぬからな。そ
のために己の身を隠したのであらうよ。数日後に記憶でも無くして
戻れば、悲劇の妻の出来上がりといわけだ」

「冗談じやねえ。やつぱりただの悪質な夫婦げんかじやねえか。そ
んなもんに他人巻き込みやがって」

女の企みが潰れたのであれば、迷うことはない。すぐにつつを迎
に行かねば。しかし、踵を返した新之助を左門は呼び止めた。

「まあ待て。どこへ行く？」

「聞くまでもねえ。迎えに行くんだよ。アンタの嫁が俺の妹分を無理やり連れてつたんだ」

ふり返りもせず吐き捨てる新之助の背中に、一筋の違和感。……？

ゆっくりふり向くと、薄い笑みを浮かべた左門が刀を掲げていて。その刃には、赤い血。

「行かせぬわ。どに隠したか知らぬが、このままあの女を戻すでない」

刀が振り下ろされる。咄嗟にかわす。

「…ツ…」

無理な体勢を取った瞬間、背中に激痛が走り、斬られたのだと気づく。左門の攻撃は容赦なく続き、新之助は外へ飛び出す。傷をかばう余裕はなかつた。

今倒れるわけにはいかない　　ただその一心で裏口から逃げ出すると、勘右衛門が見張りにと残していく手下がギョッとして近寄つくる。

「おこ、あなた…！」

「勘さんには、引田様に会えてくれ。左門に斬られた。俺はあの女のところへ行く」

返事も聞かずに駆け出し、じやけをされないといひまで行くと、荒い息を整える間もなく、手をかざし、ひずみを作った。

みつのところへ…

泣くもんか

夢を、見ていた。

緊張と戸惑いで眠れなかつた昨晩とは打つて変わつて、みつは今夜、床につくやいなや眠りに落ちていた。この家の老夫婦は本当にいい人たちで、家事やなんかを手伝つてゐるうちに、打ち解けて緊張がほどけて。ぐつすり寝てしまつたのだ。そして、夢を見た。

迷子になつて泣いていて、迎えを待ちながら寝てしまつて。遠くで自分を呼ぶ声がした。

みつ、おみつちゅーん、みつー

ひとつはお父つあんの声。もうひとつは誰だり?~

気がついたら父親に抱き上げられていた。寝ぼけ眼で父の肩越しに見たのは、真つ赤な目をして涙をこらえている少年。

泣かないで。

そんなつもつで、こひこひ笑つてみせた。だつて、こひかるとお父

つつかんはいつも笑ってくれる。けれどその少年は、びっくりしたような顔になつた。おかしいな、笑ってくれないのかな。そんなことを思いながら、再び眠りについたのだ。

みつ、おみつ、どこだ、みつ

そう、あのときと回じ。けど、今度は知つていて。あたしはこの声を知つている。

「おみつー。」

ハツと目が覚めた。覗き込んできた顔は、

「新さん……」

まだ半分夢心地だったみつは、反射的に笑みを浮かべた。目が覚めてすぐに好きな人の顔があつたら、そりやあうれしくなつて当然だもの。けれどその人は、やつぱり笑い返すより先に、びっくりした顔をしてみせたのだった。

「怯えて泣いてるかと思ったら…」

「ちつとも怖くなんかなかつたわ。だって、また新さんが迎えに来

てくれるってわかつてたもの

布団から身を起しすと、苦笑しながら新之助がそつと抱きしめてくれた。

「よかつた、無事で…。また、つてお前、ひょっとして覚えてたのか…？」

「思い出したの。あのとき迎えに来ててくれたのは、新さんだったのね」

新之助の背中に腕を回す。と、そこがぐつしょりと濡れていることに気がついた。汗？ 暗くてよく見えないけれど、なんだか額にも胸にも汗をかいているみたいだ。けれどなんだか 独特のにおい。これって。

「……血？ 血が出ているの？」

「や、帰るぞ」

息が荒い。

「新さん背中どうしたの？ そんな、動いて大丈夫なの？」

「ちつと肩貸してくんねえか。なに、大丈夫だ。お前を連れて帰る
まではくたばらねえよ」

そのとおり。

「お前…何をしておるのー。」

声を聞きつけ、りくが起きてきた。

「残念だつたな…アンタの企みは、すべて、失敗だ。俺は、こいつ、
を迎えに来た。アンタも帰りたきや、ついて来い」

息を切らせながらそこまで言つと、みつの肩を借りながら、宙に手
をかざす。

「待て。失敗だと? どうこうことだ」

「…ハア。あっちに戻りや、わかることだ。ついて、じょうづが来る
まいが、好きにしな」

振り向きもしない新之助に、りくが焦りを見せる。

「な、何を…。利吉！ あやつを止め…」

しかし、利吉と呼ばれた男「」の家を案内した若い男は、静かに首を振った。

「私はじぱいへいらがります」

その言葉に、りくが田を見開く。

「なんだと…？」

「よくしてくださったご夫妻を騙すよつな真似をして……心苦しくてなりませんでした。男手の必要な仕事を少し手伝つてまいります」

それを聞き、新之助がニヤリと答える。

「帰りたくなつたらハのじさんとのこへ行きな

「はい。そういたします」

そしてみつを連れ、ひすみをくぐる。

「待て！ 」のよつなわけのわからない所に私を置いていくな！」

記憶はそこまでだ。ひずみをくぐった先がたけやの店先であり、竹次と勘右衛門の顔を確かめたところまではぼんやりと覚えている。

しかし、みつを竹次に託したところで意識を失つたものだから、泣き叫ぶみつの声も、半狂乱になつたりくが追つてきたことも、新之助は知らなかつた。

＝＝＝＝＝

泣くもんか。ぜつたい泣いちゃだめだ。

みつはそればかりを頭の中でくり返していた。新之助は竹次の家に運ばれ、医師の診察を受けた。幸い傷は浅く、安静にしていれば後遺症は残らないだろうという。痛みに寝苦しそうな新之助を少しでも楽にしてあげたくて、けれどただただ、額に乗せた手ぬぐいを冷やすことしかできない。

ケガをした本人がいちばん不安なんだから、あたしが泣いたりしちゃダメ。

心配も不安もすべて閉じ込めて、ただ泣くまいとする気持ちだけが、

みつを支えていた。だから、新之助が田を覚ましたとき、ちやんと笑えたのだ。

「……おみつ……？」

「大丈夫よ、新さん。なんにも心配いらないわ」

「お前……」

「なあに？」

「年頃の……娘が、男の部屋に、来るなって言つただろ」

……よかつた。軽口を叩けるようなら安心だ。ホツとして気がゆるんだら、泣きそうになる。せつかくこらえてたんだから、もう少しがまん。

「……」お父つつあんの部屋よ。新さんみたいな団体の大きな人、一階へは運べないもん

薄く笑みを浮かべ、新之助は再び目を閉じる。眠ったかな、と思い、手ぬぐいを浸す水を取り替えようと立ち上がる。すると、

「ありがとな……おみつの笑つてんのを見たらホツとしたよ……」

「……。」

桶を手に、あわてて部屋を出る。せつかく、せつかくがまんしてたのに。泣かないって決めてたのにー。

廊下で涙を拭つていると、勘右衛門がやつてきた。

「お役人さま」

「新の様子はどうだ?」

「今少し困を覚ました。傷はつらそうですが、意識はしつかりしてるみたいで」

「せうか。ちょっと新と話をしてもいいかな」

どうぞ、と外へ出て行くみつと入れ替わり、勘右衛門は新之助のやすむ部屋へ入る。しかしすでに新之助はまどろみの中だった。

「よひ、気分はどうだ?」

「じつひて…痛いよ。

「お前、時間をぐぐつて来たんだな」

知つてたのか…？

「どうしてそれを言わない？ 教えてくれてりやあ、もう少し助けられたかもしけなかつたんだ」

それは、どうこう…？

「まあいい。今は休め。目が覚めたら説明するよ。ただ、な。これは覚えておけ。お前は一人じゃないってことさ」

その意味を考える間もなく、再び眠りに落ちたのだった。

ほおすきい、

「…新を、奉行所に？」

夜更けのたけや。新之助の付き添いをみつにまかせ、竹次は勘右衛門に「話がある」と切り出されていた。

「正確には、私の個人的な預かりとなりますが」

「どういづ」とだ?」

「竹次先生は、存じなのでしょう? 新之助が特殊な力を持つていることを」

勘右衛門は竹次を「先生」と呼ぶ。かつて道場で竹次に剣術を学んでいたからだ。二人が会うのは15年ぶり近い。

「お前は何を知ってる?」

「さつき新のやつ、何もない宙のひずみから出てきたでしょう。あれは、時間を超えて来たんではないですか?」

「…百年以上先、らしい」

やはり、とつぶやく勘右衛門に、竹次は再び問う。なぜ知っているのか、と。

「…その力を持っているのは新之助だけではないんです」

「なに…？」

「初めてそれを知ったのは、私の甥の身に起きたときでした」

「甥…？ 新が道場で教えてるっていう？」

うなずいて、一度酒を口に運ぶ。そして、勘右衛門は語り出した。

「ショッちゅう神隠しに遭うんだと思つていたんです。いつの間にか消えて、いつの間にか戻つている。それが、自分の意志で行つたり来たりしてんだってことに気づいたのは、あいつがハつのときでした」

それが原因で「氣味が悪い」と勘当されてしまつた甥を、勘右衛門が手元に引き取つたのだという。

「その力をうまく使えば、本当に神隠しに遭つた人たちを、あいつが助けてやれるんじゃないかと思つたんです。元服したら俺の仕事を手伝わせようかと考えてたんですがね。そつのんびりもしていました」

「といつと…？」

「どうやら回じような力を持つものが稀にいるらし。そしてそいつらが、力を悪用しているらしいことがわかつたんです。あらうことか、罪人を逃がしたり、意図的に人を神隠しに遭わせたりする。そんな生業のやつらがいたんですよ」

「なんてこった…」

「それで私は、時間のひずみを超える能力を持つ者を探し始めました。奉行所の配下に置いて、その力を世のために使わせたいのがひとつ。もうひとつは、そういうた阿漕なやつらに利用されないよう、保護したいというのも理由でした」

竹次がずっと懸念してきたのも、新之助のその力が悪用されないかというところだった。今回、恐れていたことが起きてしまった、と思っていた。しかし、組織的に悪事を働いているようなところへ連れて行かれ、無理矢理協力させられ続ける、などということもあり得るということだ。それは竹次が抱いていた懸念の比ではない。

「あいつを…新を守ってくれるか」

「そのつもりです。今のところ、甥を含めて三人見つけています。ほかに見当をつけている者が一人。新が加われば全部で五人の体制を組める。表立って発表できる組織ではありませんから、奉行所の正式な一員、というわけにはいきませんが。内々に上の承諾は得ています。禄も出る。私の元で普段は奉行所の仕事を手伝いながら、

依頼があれば行方不明者の探索をする　どうです？　先生から新を説得していただけませんか」

「そいつあ……そりやあ願つてもない話だ。俺はずつと、新にあんな商売は止めさせたかった。しかし新は、自分が止めてしまったら神隠しに遭った人たちはどうなるかと、手の引き時を見失つてたんだ。それが、お役人としてその力を生かすことができるところば、こんなありがたいことはねえ……新に、その話をしてもやつてくんna。俺が説得するまでもない」

勘右衛門はようやく緊張の表情をほどいた。途端にこの男独特の軽い空気をまとい直す。

「私が長々と説明するより、先生がひとこと言つてくださいれば早いんですけどね」

「…何と？」

「浪人者のところへ嫁にやる『気はねえ』、とね」

竹次はため息をつき、酒をあおった。

「あこつり……やつぱりつうなるかねえ」

「やうなるでしょ！」

「新は…お武家だ。どのみち、みつが嫁に行ける先じゃねえよ」

「なんの。前例ならお父上がお持ちでしょ？」

「お前…それを」

「惚れた娘の家業を継ぐために、十手を包丁に持ち替えた男。今まで伝説ですよ」

チツ、と舌打ちが返る。

「…新が起き上がるよ！」になつたら話すよ。お前も時間が合えば来てやつてくれ。みつのことは、俺がどうこうする話じゃねえ。二人が考えりゃいいことだ」

勘右衛門がニヤリとし、あとは静かに酒を酌み交わす。口数の少ない竹次を相手に、ほつりほつりと語る勘右衛門の声が、この夜のたけやに遅くまで続いた。

みつは、まだ知らなかつた。目の前にある、この男の寝顔を見られるのは今だけだと思っていたから、焼きつけるのに必死だった。

初めて好きになつた人。初恋の相手のこの人は、そう遠くないうちに、元いた場所へ戻つてしまつだらう。そこがどこなのかすらわか

らないみつにとつては、もう手の届かない人になってしまつ。

看病ところが名を借りてそばにいらっしゃるこの時間を、ありがたく思つてしまつのは、痛みに苦しむ新之助に申し訳ないのだけれど。

=====

新之助の回復は早かつた。数日後には起き上がりようになり、体力回復のためと、みつを付き添いに近所を歩けるようになるまでは、そう時間はかからなかつた。

奉行所の仕事につかないかという話は、早い段階で聞いていた。是非もない。即座に膝をそろえ、手を突いて頭を下げていた。ただ、みつにはまだ、話していない。それは新之助に任せると、竹次に言われている。

他愛もない話をしながら、ゆっくりと歩く。最近の日課を、新之助は気に入つていた。早く回復させて仕事につきたいと焦る新之助に、みつとの時間はやせしく肩をたたく。今はもう少し、ゆっくりすればいい、と。

「新さん、ほらあそ」。猫が寝てる。あのダラッとしたとこなんか
「新さんそっくりね」

「バカ言え。ここいらのメス猫は大概あいつのお手つきだぜ？俺はそんなに見境無くねえよ。相手はきつちり選ぶ」

みつを小突けば、バカばっかし、と腕をはたかれる。みつは相変わらずの減らず口だったが、以前のようにきやんきやんと突つかつて来る」とはなくなつた。

あの日。刀で斬られた痛みに朦朧とする中で見た、みつの顔。「丈夫、なんにも心配いらない」と、新之助に向かつて微笑んでみせたみつの顔に。新之助ははつきりと自覚した。

ああ、こいつはもう『妹』なんかじゃない。

あの日から、新之助にとつてみつは一人の女になつた。ただ守りた
いばかりではなく、自分もまた、彼女に包まる。

「どうせあたしは、『百合の花』じゃないわよ」

どこからどうつながつたのか、そんなことを言つて唇を尖らせるみ
つに、新之助は苦笑する。すべてが解決した今もなお、新之助が妖
艶な女性と二人きりで過ごした時間にやきもちを焼いているらしい。

「そうだなあ。おみつは百合ではないわなあ」

また怒り出すかと思ひきや、田をぐるりと回して新之助を覗き込んでくる。

「ね、じゃああたしはどんな花?」

「だから俺ア花の名前なんぞ知らないって…」

花の名で知っているものなんて、せいぜい桜に紫陽花、たんぽぽくらいのものだ。

「……ああ、たんぽぽか」

「たんぽぼー?」

みつは、がっかりしたような複雑な顔になるが、構わず続けた。

「あれはお口さんの色してゐしなあ。よく見りやどつてことねえが、一番に見つけると、ああ春が来たかとうれしくなる ま、食つて食えないこともなし。実用性もあつて、あれで大した力持つてんだぜ」

散々な言い方だが、みつは頬がゆるむのを抑えられない。

「たんぽぽ…」

かみしめるよにひつぶやくみつを見る新之助の目が、とても優しいことによつは氣づいていない。

「ああ、もつと似てるのがあつたな」

「え、なあに？」

新之助が指さす先には、縁台に置かれた鉢植え。

「…ほおずき？」

「すぐ真っ赤になつてふくれるとこなんぞ、そつくりだ」

「なつ…」

「そり、ふくれた」

笑つてみつの頬をつつく。もう知らない！と、みつはスタスターと先を行つてしまつ。それまでは、新之助の体を氣遣つてゆっくり歩いてくれていたのだ。

「みつ」

「何よシ」

「傷がよくなつたら、俺はたけやを出す」

みつの足が止まる。

「……ナウ」

「勘定をと下はつへ」となつたんだ。しそひへせ見廻こだ」

「あの、お役入さま?」

職につかるのだから、おめでとうござまゆ、と喜わなくてはいけないのだとひづれど。なかなか喉から出でこない。

「しまむらへま、親父の飯も食えなくなるな……みつ」

みつは何も言はず、ただ見返すだけで精いっぱい。

「お前さんの亭主になるにや、包丁は使えないもこいんだつたな

？」

「……。」

ぽろりと落ちた涙を拭つてやると、そのままみつの頬に手を添える。きれいな涙だ、と思った。次から次と止まらないことには困つたけれど。

「あたしは…」

いつもみつの頭を撫でていたその手が頬に置かれ、思つていたよりも大きな手であることにみつは気づく。

「あたしは、たけやをずっと手伝えたらそれでいいの…」

けど。いつか、たけやよりも、父親よりも、大切に思う人に出会うような気もしていた。

「そうか…」

頬に手を添えたまま、親指が頬で遊ぶ。その肌触りを楽しみながら、しかし、と新之助は思案する。

うまく行つて、このまま役人の身分になれたとして。その内儀が食堂の手伝いというのはマズいだろうか。いや、実家の父親を助けるためといえば問題ないだろうか 新之助が早くもそんな心配をしていることを、みつは知らない。ただただ、真っ赤になつて新之助を見上げるだけ。

みつは知らない。あと数年のうちに、その夢が叶うこと。

新之助が出て行つてしまつたら、かわりにほおずきの鉢を買ってこようかな、などとぼんやり考える。その間に、もうすぐ新之助の唇が重なることも。みつはまだ知らなかつた。

これからも、みつの毎日は小気味よく続いていくに違いない。

おつかれさま（後書き）

おしまいです。お読みくださいありがとうございました。
最後のほうのくだりを書くためだけに作ったような話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083t/>

ほおずき、ぱん

2011年8月7日23時44分発行